**寄　稿**

**ロレンスとマードックの接点――父性的知と母性的愛**

**野口　ゆり子**

　私は２００２年に『ロレンス　精神の旅路――クリステヴァを通して読む』（彩流社）を出版しました。その第一部で、クリステヴァのアブジェクシオンの理論を用いてロレンスの作品を考察していったのですが、それをエディプス・コンプレックスを用いたものの焼き直しであると理解した人もいたようです。母を強く愛したロレンスの作品をエディプス・コンプレックスで解釈することは容易です。しかしそれでは、ロレンスが作品のなかで見せる、言葉と沈黙への欲望と嫌悪という相反する感情を理解することはできません。私はそれをアブジェクシオンの理論を用いて解明したのでした。第二部では、クリステヴァの間テキスト性の理論を応用し、ロレンスの作品を様々な作家や哲学者の作品とともに考察しました。第一部に興味を持った人もいれば、第二部のほうに興味を持った人もいたようです。しかし、一つのことをすることが肝要だとして筆者の姿勢を批判した人もいました。拙著は、文学の新理論を志向する人たちには好意的に受け入れられたようですが、旧来の手法を信頼している人たちには受け入れられなかったようです。拙著の主張を補足するものとして書いたのが『ロレンスとマードック――父性的知と母性的愛』（彩流社、２００４年）です。

　ロレンスとマードックを同じ地平におくことで見えてくるものは、母の胸のなかに生み落とされた後、言葉の世界に再び生み落とされる運命にある人間が、必然的に経験する知と愛の相克です。ロレンスの場合は作品のなかで肉体への欲望が前面に出ているため、彼の父性的な知への欲望が見落とされ、マードックの場合は知的な言葉に惑わされて、そこに父性的な知と母性的な愛の間で揺れ動くというアブジェクシオンの典型が描かれているということが見落とされがちになります。
『ロレンス　精神の旅路――クリステヴァを通して読む』ではロレンスにおける母を考察するために、『息子と恋人』から『チャタレー卿夫人の恋人』までを取り上げたので、彼の最後の作品である『アポカリプス』は言及するだけになりました。しかし、ロレンスの知への欲望と嫌悪を考察しようとする時、『アポカリプス』はもっとも重要な作品です。『アポカリプス』は、ロレンスにとって知の象徴とも言うべき存在であったラッセルとの愛と仲違いゆえに生まれたものでした。ロレンスのラッセルという父性的存在への愛と憎しみを理解するために、知に信頼をおきながら多様な愛の姿を描いたマードックが必要でした。それは、イギリス哲学の伝統のなかで教育されたマードックは、父性的な知と権力を愛した典型的な父の娘であり、伝統に抵抗し、新しい愛の形の追求と思想の冒険を行おうとした母の息子であるロレンスの対極に位置する存在だからです。

　『ロレンスとマードック――父性的知と母性的愛』では、おもに『哲学者の弟子』と『本と友愛』を取り上げました。それらはともに哲学が主要テーマになっており、哲学を書きたかったロレンスを理解する上で最適なものでした。母は自然と文化の架け橋であり、すべての人は母を内面に隠し持っています。ロレンスの内なる母の解放は『アポカリプス』では、読み手に寛大な解釈を求める彼の言葉と思想に現れています。一方、マードックの内なる母の解放は、常軌を逸した登場人物の行動に現れています。しかし、彼女の明晰な言葉で描かれる物語はシェークスピア劇のように普遍性があり、ロレンスとマードックを対峙させることで、ロレンスの思想の現代性と特異性が明らかになります。ロレンスは、自分を束縛する社会・文化に抵抗するために内なる母を利用したと言えますが、マードックは、小説のなかで内なる母を解放することで、多様な愛を経験しようとしていたと言えるでしょう。知と愛の相克は、母の胸のなかから言葉の世界に生み落とされる人間の宿命として、私たちの前に横たわっているのかもしれません。